

# 進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 横田尚義 印刷 常陽新聞社



進修記念館

(大久保写真館提供)

## 進修同窓会長挨拶

—土浦一高の諸君へ—

会長 幡谷 祐一



若い生徒諸君が、このような問題を真剣に考え、皆さんの時代にしっかりと日本国の基盤を築くことが必要なのです。一人一人が教育、国防、独立、主権といった国家の意識を強く持つことが求められるのです。

半世紀にわたる平和ほけ、危機感の希薄さ、物質に恵まれ過ぎたことの結果でしょう。我慢や忍耐などを忘れてしまったことが、いま取沙汰されている「十七歳」の問題などにも通ずるのではないかと、思うのです。

人間易きに走るのが常ですが、「艱難汝を玉にす」という言葉の如く、人は苦勞してこそ初めて立派になれるということです。「若いうちには求めても苦勞せよ」とも言われています。

生徒の皆さんはいま勉強が仕事ですので、これに専念することが求められています。この時期に学力をつけ、自己を磨くかどうかは、これからの人生を大きく左右すると言えます。立派な社会人となることに、ひたすら心を傾注されることを期待いたします。

日本語の乱れ、正しい歴史ということに関して、我が国も今になってやっと認識を持ち始めました。また、教育制度の改革等々、日本を本来の姿に戻そうと始動したようです。

少子化ということが言われていますが、これもまた日本国にとっては大変な問題です。米国は今後五十年の間に、現在の人口の倍、五億人を目指していると伝えられています。反面、日本はというと、人口は減る一方で、二〇五〇年には八〇〇〇万人くらいになるだろうと言われています。力を支えるのは人であり、人口の少ない国は衰退していくものと思われま

# 平成十二年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月九日(日)、本年度定期総会が母校体育館にて、約三〇〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

まず、校歌斉唱・物故会員に対する黙祷ののち、豊嶋貴副会長・長瀬宗男校長の挨拶があり、木島幸夫本部幹事を議長として以下の議事が審議されました。

- 一、平成十一年度事業報告
  - 二、平成十一年度決算報告
  - 三、平成十二年度事業計画
  - 四、平成十二年度予算
  - 五、同窓会基金報告
    - (A) 平成十一年度決算
    - (B) 平成十二年度予算
  - 六、別途積立金報告の件
  - 七、役員の変更について
- 七号議案については、幡谷祐一会長以下前役員全員が新役員に承



総会で挨拶する豊嶋副会長



応援団、プラスバンドによる校歌斉唱

認められました。一、六号議案も、十分な審議ののち、満場一致で可決・承認されました。

閉会の後、引き続き母校体育館で恒例の卒業周年祝賀式が開かれました。本年は、中三十九回(六十周年)、中四十九・高二回(五十周年)、高十二・定十回(四十周年)、高二十七・定二十五(二十五周年)の方々をお招きしました。中四十九回と高二回生は同学年のため、本年一緒に五十周年をお祝いしました。

祝賀式では、高三回卒で来年五十周年を迎えられる長壁英進氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、本年五十周年を迎えられた高二回卒田嶋為太郎氏より謝辞が述べられました。

また、会場を別に移しての祝賀会では、往時を懐かしんでの交換が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。特に、高十二回(四十周年)の方々の参加が多く、たいへん盛り上がりしました。最後に、全員で校歌を斉唱しました。

**平成13年度進修同窓会総会案内は7面に掲載してあります。**

## 少子化 本校にも押し寄せる

学校長 長瀬 宗男



進修同窓会の会員の皆様には、ご壮健にてご活躍のことと、心からお喜び申し上げます。

二十一世紀最初の年は、本校にとって「変化の年」になります。昭和四十四年に設置された理数科が、平成十三年度から募集停止になるのです。多くの有為な人材を輩出し、三十一年の歴史を有する理数科が閉じられることになりました。この経緯を少し説明しますと、団塊の世代と言われた、昭和二十二年頃の合計特殊出生率(一人の女性が一生の間に生む子供の数)は四・五で、年間約二百七十万人の赤ちゃんが誕生しました。それが昭和三十三年には、二・〇四。人類史上初めて十年間で半減、出生数は百五十七万人に減少いたしました。更に、昭和四十一年は丙午で出生率は、一・五八まで下がりましたが、その後は第二次ベビーブームで、出生数は毎年二百万人を超えたこともありました。しかし、これを過ぎると出生率は低下傾向が続き、ついに平成

元年、「一・五七ショック」と言われ、丙午の一・五八を割り込みました。平成五年には、一・四六、十年には一・三八。平成十一年には、ついに日本史上最低の一・三四まで落ち込みました。茨城県においても、中学生の数は平成元年がピークで、この時の中学生三年生は、約四万九千五百人でした。その後毎年減少し、十三年三月の卒業生は約三万六千五百人で、元年と比べると一万三千人の減少、十二年度より千七百人減少します。推計では、茨城県への転入など社会増がない場合、平成二十一年には、二万人を割り込んでしまうようです。現在、県立高校は百十一校ありますが募集定員を満たしている学校は七十一校で、約三分の一の学校が定員割れを起しています。このような現状の中で、平成十年度に、今後の県立学校のあり方を検討する「茨城県高等学校審議会」が開かれ、平成十一年四月に「生徒減少期における県立高等学校の質的充実を図るための学校の適正規模・適正配置について」が答申されました。その中で、学校規模は「一学年四、八学級とする」とあります。この時点で一学年九学級ある学校は、日立一、水戸一、土浦一、土浦二の四校でした。そのうち日立一

(2面から)

は、十二年度募集から一学級減じました。残りの三校が、十三年度募集から八学級になります。土浦二高では伝統の家政科がなくなくなり、水戸一、土浦一、土浦二ともに、一学年八クラス、男女共学の普通科のみになります。学校が縮小するのは寂しいかぎりですが、他の県立学校の現状を考えると仕方ないのかと思います。

次に、体育館の建て替えが十三年度から始まります。昭和四十三年に竣工した現在の体育館は三十二年の歳月に傷みも多く、修理ではすまなくなりまして。現在の場所には、日照権の問題などで建てられません。場所を変えて新築することになりました。まだ設計は出来上がっておりませんが、二階建になり、十四年度に竣工の予定です。

さて、現在、教育界では、少年犯罪の深刻化・凶悪化、価値規範意識の低下、学級崩壊、いじめ、学力の低下、不登校など、頭の痛い問題がひしめいています。学校の生徒は、目的意識をしっかりと持って勉学に運動に励んでいると思います。しかし、残念ながら、本校の生徒の中にも、現代社会の反映か、規範意識の低下の見られる生徒が少しあります。また、もう一つの問題の「学力低下」ですが、新聞や各種の雑誌をみますと、大学生の中にも、掛け算や分数の計算が出来ないなど、基礎・基本が身につけていない生徒が増えているのではないかと指摘がされています。文部省の教育改

革の目玉は、「ゆとりのある教育」ということです。今までの教育は「知育偏重の教育」、「画一的な教育では、個性や創造性が育たない」、「受験勉強がストレスを生み、非行、暴力、いじめ不登校などを生み学級崩壊や学校崩壊が起こっている」。だから小中学校で教える内容を減らし、その分は高校に移行して教えるから、トータルでは学力は落ちないというものです。私は、このことに疑問を持っています。「ゆとり、ゆとり」と言うことが、「勉強はしなくていいんだ」、「個性尊重」ということは、「何をやっても自由なんだ」と、子供には聞こえているように思えるのです。本校では、あくまでも教育の目的は「豊かな人間性の育成」と「大学で高等な学問を学ぶための能力を育成する所」と考えています。即ち、まずは「授業」をしつかり生徒に受けさせることだと考えています。教員は十分に教材研究を行い、真剣勝負で授業を行っていただきます。生徒に高度な授業内容を理解してもらうためには、どうしても時間が必要で、平成十四年度から、学校は完全五日制になります。しかし、本校では教える内容を減らしたくありません。能力のある生徒には、その能力に応じて教えることが必要と考えます。そこで、本年度から、今までの五十分授業を五十五分授業に変え、少しでも多くの授業時間の確保を図っています。「生徒も先生も授業を大切に。」そのために、「家庭での予習・復習を十分行

う。」これが本校の伝統です。このことを守って行きたいと思えます。日本は土地も資源も少ないのではありません。ただし、その頭脳しかありません。ただし、その頭脳も鍛えなければ伸びません。ただ単にゆとりを与えれば、「自ら学び、自ら考える力」が育つ。そのような人間は、ごくわずかではないでしょうか。

次に本校の現況についてご報告いたします。

最初に今春の進学状況ですが、東大への合格者は現浪合わせて三十一人で、一人足りなくて全国の公立高校では、第二位でした。現役合格者は二十人で、これも一人たりなくて第二位でした。また東工大へ十四人、そのうち現役が十三人と健闘致しました。現役進学率は約五七・四％で、昨年とほぼ同じです。詳しくは、母校だよりの面をご覧ください。

また、学校行事、部活動等の活動状況ですが、恒例の一高祭は六月二日、三日、四日の三日間行われました。生徒たちが昨年から企画立案し、様々の会場で、学年を越えて頑張ってくれました。九月には一高オリンピック、十月には歩く会、講演会と続きまして。さらに一年生は、七月にボランティア活動、東京で本物の芸術を味わう芸術鑑賞会、二年生は、進路講演会、職場見学等、多彩な行事を生徒の自主性を生かしながら行っています。

第五、第六通学区から本校を受けることが出来るようになりました。ただし、千葉県、茨城県との併願は出来ません。昨年度までは、他県の合格者数は募集人員の一五％でしたが、これからは三〇％になります。本校の募集人員は、普通科八クラス(三百二十人)になると思います。正式な募集人員については十一月末に発表されます。次に合格者の選考ですが、二段階方式になります。例えば、募集人員が百人とします。まず、学力検査の点数で八十人選びます。次に調査書の点数で八十人選びます。この両方に入っていれば原則合格です。合格者が七十人出たとします。合格する残りは、三十人です。これを七・三から三・七までの五段階より選択、本校は七・三)と、学力検査で合格を判定する者二十一、調査書で判定する者九人になります。あとの判定は、双方とも、調査書の観点別学習状況や特別教育活動の記録などを合格判定の資料として利用します。この新入試について疑問点がありましたら、どうぞ学校までご質問をお寄せください。

ところで、七月に残念なことがありました。理科の柴田克洋先生が突然逝去されたことです。身体が突然に気付いて病院に行つてから六日後でした。残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。最後に、生徒諸君に望むことを述べたいと思います。現在、日本の国には、世界一の膨大な借金、そこの倒産、雪印の食中毒事件、三菱自動車のリコール隠し、凶悪な事件、三宅島や有珠山の火山災害、鳥取の地震など、暗いことが余りにも多すぎます。十年前日本の経済は絶頂期でした。そして、世界各国に進出し摩擦を起しました。その時、特に、アメリカでは、経済状況がどん底で、失業者も増加しました。そこへ、日本の企業は輸出攻勢をかけ、不動産の買いあさりを行い、アメリカ人の誇りを傷つけてしまいました。その時の日本バッシングは、凄いいものでした。そのアメリカが今は世界で、一人勝ちの様相を示しています。その原動力は、ビル・ゲイツを代表とする若者のフロンティア・スピリットではなかつたでしょうか。これからの世界で何が必要か、何が求められているのかを見極める洞察力、新しいシステムを生み出す創造力、諦めず最後までやり通す意思力、このようなことが、今の日本にも必要なのではないのでしょうか。戦争に生き残った若者は、日本の復興を目指して、たいへんな努力をしましたが、二十一世紀の日本を背負うのは、皆さんです。そのためには、皆さんが持つそれぞれの得意分野を磨くことです。頭脳を磨き創造力を発揮する人、技能を磨き誰にも出来ないような製品を作り上げる人、それらの人々が、協働することによって社会に貢献するんだという意識を持つてもらいたいです。皆さんに期待します。

# 研究とビジネスのかけはし

高七回 石田 晴久

(東大名誉教授・多摩美術大学教授)

## 大学では実用研究

私は九七年春に東大を停年退職しましたが、それまでは大型計算機センターに所属していました。このセンターは東大の一部局ですが、全国の大学研究者の共同利用機関になっています。そこには、最新鋭のスーパーコンピュータや大型機が設置され、いろいろなコンピュータが使い放題という大変恵まれた環境の中で仕事が出来たのは幸いだったと思います。

このセンター時代、私は個人的には、大形コンピュータよりもパソコンやインターネットに興味がありましたので、それらの研究開発には初期から取組んできました。ただパソコンもインターネットもいまだというIT(情報通信技術)の中核をなすものだから、実用と深い関係があります。

したがって私がやってきたのは基礎研究ではなくて、応用研究、実用化のための研究です。しかもそれをセンターでやっていたので、学生の指導は余りせず、メーカーの技術者につきあひながら進めていました。ですから大学の研究者といっても最も現場に近い研究者だったといえるでしょう。

## 情報デザイン学科へ

さて、東大を退官したとき、その後の進路にはいくつかの可能性がありました。複数の仕事を兼業することにし、ひとつの進路を多摩美術大学にしました。同大で情報デザイン学科という新しい学科を創設することになったからです。

この学科は、コンピュータを用いて、さまざまな情報をどう効果的にデザインするかを研究する学科です。いまの時代はITの技術よりは、コンテンツ(正しくはコンテンツ)というべきです)の方が重要といわれますが、私も年のことも考えて、重点をこちらに移すことにしました。

この学科では、いわゆるマルチメディアのデザイナーやクリエイターを育てようというわけですが、それには、パソコンと発表の場としてのインターネットが欠かせませんし、デジタル技術の基礎知識も重要です。それらを若い女性達(美大では六割位を占めます)にどう伝えるかが、私の現在の課題になっています。

もうひとつ私が心がけているのは大学改革です。まだ大したことはしていませんが、新設学科でするので、センター入試、ベンチャー

企業論、任期制教員やインターンシップ(学生を企業で研修させる)などの導入を試みています。パートタイム教授制も導入して、私がその第一号になろうかとも考えています。

## ベンチャービジネスの応援

私が東大停年のときに残念に思ったのは、世の中の大多数の人が会社勤めをしているのに、自分(は)会社(の)ことは何も知らない、ということでした。そこで、兼業おかまいなしということから、ベンチャー的な企業に入って、自分の開発してきたIT技術をビジネスで活かすことも試みることにしました。

幸いにして、私は、日本では最も初期からパソコンやインターネットの開発を手がけてきた一人です。これらは今や花開く時期を迎え、とくにインターネット関係では、ベンチャー企業が続々と生まれ、私もそのうちの数社と、役員とか顧問とかいう形でおつきあいすることになりました。インターン学生を受入れてくる企業との交流も始まっています。

こうして企業と関係してみても強く感じるのは、大学とくに国立大学と企業が非常に違うことです。東大センター時代、私は毎年、予算書を作りましたが、それには、利益とか損益とかいう項目はありませんでした。研究もただ面白いからやるのであって、それからどんな商品が生み出される

か、にはおこまいなしでした。しかし、企業では利益は最も重要な項目です。これに習って、大学とくに私立大の情報デザインのようないまの学科では売れるデザインがでなければならぬと思ふようになりました。

## ボランティア活動

私のように、世の中のいろいろなところでお世話になって第二の人生を歩んでいる者にとっては、ささやかではあっても社会貢献を心がけなければなりません。そこで、私に何かできそうなことには積極的に参加するようにしています。



石田、野口(会津大学長)、前川(早大)

私の目下の関心事は、インターネットのさらなる普及と高度化、ネットのセキュリティの向上、IT技術者の教育、IT技術の導入による教育改革、ベンチャー企業の応援などです。

これも私にとっては幸いなことに、業界団体のお世話とかコンテストの審査とかいった形で、協力できる場がいろいろあります。例



えば、土浦一高の生徒さんにも参加して欲しいものとしては、シンク・クエストという「教材として使えるホームページ」を作成するコンテスト、というのがあります。これは国際的なコンテストで、こうした国際活動への協力も日本人として重要なものはいまでもありません。旅行が好きなのは、国際学会への協力とともに、こうした対外活動にも力を入れています。

【略歴】石田晴久(いしだ・はるひさ)一九三六年台湾彰化市生まれ。戦後引揚げて父の実家である筑波郡筑波町に住む。土浦一高、東京大学理学部卒業、同大学院修士修了後、フルブライト留学生として渡米、アイオワ州立大博士号取得。六四年マサチューセッツ工大研究員。六六年電気通信大学助教授。六九年東京大学大型計算機センター助教授。八四年教授。九七年名誉教授、多摩美術大学情報デザイン学科長教授、慶応大学教授。この間、コンピュータやインターネット関係の研究開発に従事。一般向けの著書は、『新パソコン入門』、『パソコン自由自在』など多数。ボランティア活動は、日本ネットワーク・セキュリティ協会会長、情報処理学会編集長、教材用ホームページ審査委員長など。自宅は東京都渋谷区代々木。

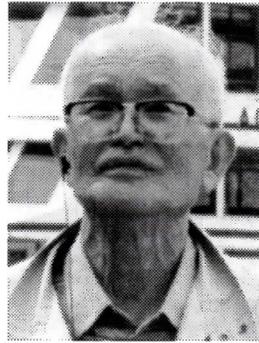
# 恩師を訪ねて

⑤

## 理科 佐々木孝三先生

(在職 昭和十八年五月〜三十六年三月)

(現在八十一歳)



私は東北の山形市で生まれましたが、五才の時に父の仕事の関係で東京に出て、小学校からずっと東京で過ごし、昭和十六年の三月に東京物理学校を卒業し、田舎の生活がしてみたくて、宇都宮の近くの小さな町の県立中学校の教師になったのですが、東京で育った私は、田舎の生活になじむことが出来ず、誘ってくれる人があって、昭和十八年の五月に、県立土浦中学校に移って来ました。その時私は二十四才でした。

昭和十八年といえば、敗戦の色が次第に明らかになって来ていたのですが、国民の前にはそれはかくされていて、私もそういうことは余り気にせずに、土浦に移って来ました。そして八月に、その頃は高台の草はらだった今の土浦三高のある場所に、軍関係の適性部というのを建築する為の地ならし工事に勤勞奉仕に出た生徒の監督をして健康をそこない、一年程のあいだ学校を休みました。

その一年程のあいだに戦局は悪化し、私が勤めに復した昭和十九年の秋には、県立土浦中学校の四年生五年生は軍関係の工場などに動員され、学校で授業を受けていたのは、三年生以下だけだったような気がします。

その後戦争は益々敗色をくしくして、昭和二十年三月十日には東京大空襲があり、昭和二十年四月以降は、二年生以上は工場に動員され、県立土浦中学校の生徒で、学校で勉強するのは一年生だけとなり、私は一年生の組担任として授業をしていましたが、通る自動車もない広々とした朝の真鍋の国道の坂道を、一年生だけが登校してくる様子は実に寂しかったのが印象に残っています。

### 八月十五日敗戦

敗戦について思い出に残っている事は色々ありますが、そのひとつに、八月十八日であったと思うのですが、阿見の予科練から学校に連絡があり、予科練の解体に当って、予科練にある器具や実験道具などで中学校の理科の教育に使えるような物を渡すから、引き取りに来てくれとのこと、教頭から言われて私が、阿見付近の生徒の父兄の農家に頼んで、当時農家で使っていた牛に曳かせた荷車を一台用意して貰い、引き取りに行

き、「これからの日本で大切なのは教育です。学校で理科の授業に使ってください。」と言われて、実験用の電気メータなど電気器材を学校まで運んだことなどなどがあります。

色々なことがありましたが、県立土浦中学校としての教育活動がようやく軌道にのつたのは、昭和二十一年の四月でした。

授業が軌道にのつたとは言っても、全ての物資が不足していた時代、授業をやるうえにも教科書も不十分だという状態、教材プリントを印刷しようにも紙が手にはいらないという有様でした。化学実験用の薬品も手に入らず、化学薬品ありますという新聞広告を頼りに東京まで買いにゆき、実験用の薬品で粉末や結晶はリュックに入れて背負い、硫酸、塩酸、硝酸などという酸類のびんは何本かしばって両手にさげ、夜おそく帰って来たことなどもありました。

その頃、写真部の顧問教師をしていて、学校に引き伸ばし機がなかったので、形は市販の物をまねて木製で引き伸ばし機を生徒と手製したこともありました。ランプハウスは大型の鐘話の鐘を使い、引き伸ばし用のレンズとしては、学校にあった凸レンズを二枚組合せて使いました。

昭和二十五年四月から二十八年三月までの三年間は、健康をそねて休職しましたが、二十八年四月からは仕事に戻ることができました。

昭和二十八年からは、その当時土浦一高に併設されていた、通信制高校の生徒の指導にも当りましたが、通信制高校で勉強する生徒には、非常に熱心で、登校日の授

業を待ち兼ねるようにして登校してくる人が何人もいたのが、強く印象に残っています。通信教育の主事であった山口左武郎先生と私と通信教育の生徒とで筑波山に登ったことなどもありました。

全日制で私は、物理、化学、地学などの授業の他に、天文気象部という地学関係のクラブの顧問をして、夏休みを利用してバンガローに自炊で一泊して、日原の鍾乳洞を見学する旅行に、昭和三十年と昭和三十四年と二回、クラブの生徒と一緒に出掛けることができたのは楽しい思い出です。

見学旅行で撮影してきた鍾乳洞内部の写真などを、その当時の古い物理の階段教室で、部員みんなでおそくまでかかって引き伸ばしをして、文化祭に展示したりもしました。

昭和三十二年には、直径十センチの凹面鏡と斜鏡とアイピースなどを購入して、生徒と一緒に反射式の天体望遠鏡を自作しました。

昭和三十三年四月十九日、天気象部日食観測、という部員の集合写真が私の手元に残っており、その中央に手製の十センチの反射望遠鏡が写っています。その反射望遠鏡を使って写したと思われる、その日の日食の食甚の写真もあります。

それから私の教師としての生活に大きく影響したカウンセリングには、はじめて触れたのも土浦一高勤務中のことでした。土浦一高に「カウンセリングの係」が出来たのは昭和三十三年の事のようにおぼえています。主任の瀧田勝先生から誘っていたので、瀧田先生と後藤秀雄先生と私の三人でカウンセリングの仕事を始めました。瀧田先生に指導していただく

ことが多かったのですが、三十四年の夏休みに、日立の茨城キリスト教大学で行なわれた、一週間の夏期合宿カウンセリング研修会に参加させてもらって、私ははじめてカウンセリングの実際の姿に触れ、強心をひかれました。そして土浦一高のカウンセリングも軌道に乗り始めた頃、昭和三十六年に、設立三年目の県立土浦工業高校に私は移りました。

土浦工業に移ってから、昭和五十七年退職するまで、物理の授業を担当し、物理の教材の自作をしたり、物理部という部活動の指導もしましたが、カウンセリングの仕事も続け、生徒の生活にもふれる事が出来ました。

物理部という部活動では、機械科や電気科の先生方の援助もあって、二十センチの凹面鏡の付いた赤道儀を自作したり、それを設置する為の四メートルの半球形ドームの自作をしたり、リニアモーターカーの模型の製作などもしました。

今、過去を振り返ってみて私は、人生って面白いものだな、大したことは出来ないにしても、自分にやる気があれば他人も力をかしてくれ、色んなことが出来るんだ、という思いがします。

土浦一高は進学校として、すばらしい成績をあげています。受験競争の激しい現在、高校生の生活は容易でなく、苦しいことも多いと思いますが、私は生徒諸君に、土浦一高三年間の生活を通して、学問を理解し学問を愛することの喜びを知って欲しいと切望します。

卒業生レポート

⑤

西東京法律事務所・弁護士

栗山 れい子

高二十二回(昭和四十五年卒)



一 高校時代の思い出

一九七〇年三月土浦一高を卒業しました。高校時代を振り返って、これといったエピソードはありませんが、ゆっくりと流れる時間の中で、楽しかった様々なシーンが頭を過ります。のほほんとした生真面目な高校生だったろうと思います。

ただ、何をしたい、何をしようかと決めていたわけではありませんが、自分で仕事を続けて行くことと、自分で働いて食べて行くことは、私の中では前提になっていました。いわゆるキャリア・ウーマン的な意味ではありません。農家の育ちですから、農作業と家事をする母親の姿から、自然にそんな思いをもっていました。

大学入試は法学部を選びました。が、弁護士を考えていたわけではありません。理系が苦手な文系を選択し、かといって文学部に入学したい訳でもない中で、担任の先生から、法学部が一番潰しが利きそうだというアドバイスされ、法学部を

選ぶ、という消去法でした。

二 司法試験の受験

大学に入学し、学生運動の残り火の中に身を置きました。デモに参加し、集会に参加し、ピラを配り、そんな毎日の中で、私には先頭を歩くのは難しそうだが、後ろから拾って行こうと思ひ、弁護士を考えるようになりまし。また当時は、四年制大学を卒業した女性が就職しようとする、公務員以外は、非常に就職が難しいという状態も、司法試験を選択した要因になっていと思ひます。

大学時代に接した判決で、非常に印象に残っている判決文があります。一九六六年に東京地裁が出した、結婚退職制を無効とした住友セメント事件の判決です。均等法もできた現在、女性は結婚したら退職するという制度の不合理性に、異論を差し挟もうという人はいないと思ひます。しかし、当時は、女性が結婚したら退職する、労働力が社会的にも家庭内の収入の面においても補助的であるという役割認識が一般的でした。

ずっと仕事はして行くものと考えていた私の頭の中でも、世の中そんなふうな考えられているものと思ひていました。それに対して東京地裁の判決は、憲法一四条の性による差別の禁止、憲法二四条の婚姻の自由の保障を引きながら、結婚

退職制はこれを侵害する制度であり、民法九〇条の公序良俗に反するとして無効を宣言しました。ここでいう公序良俗は、いわゆる常識で語らるる世界ではなく、憲法理念に基づいて構成される社会秩序を意味します。私はこの判決に接して、びっくりしたというのが正直な気持ちでした。私はこの判決を、理屈ではなく皮膚感覚で受け止めました。法律の適用はこんなに大胆なんだ、それまで保守的と考えていた司法の世界も捨てたもんじゃないんだと思ひました。

よく考えてみれば、一九六〇年という時代は、日本の裁判所が、一番自由で生き生きしていた時代でした。住友セメント事件の判決もそんな時代の中からも生れたものかもしれません。その後最高裁は大きく右方向に軌道修正をしました。しかし、女性差別に関する判決は、その後も差別を違法、無効とする判決が相次ぎ、差別撤廃の運動や女性差別撤廃条約の批准も加わって、均等法が制定されるに至ったのです。

私が弁護士になってなにかできる、と思ひたときです。

三 弁護士になって

弁護士になって二二年。事務所は、東京の西の端にある八王子市にあり、東京二三区以外の三多摩地域が仕事の中心です。何の縁もなかった三多摩地域を仕事の中心にしたのは、私が学生時代から引きつづいてきた運動好きに由来するものです。

弁護士になった一九七九年当時、三多摩地区には、中小の労働争議や様々な住民運動が多数存在していました。そして、都心ほど大きくない中で、それぞれ運動が密に連携しながら動いていました。弁護士として関与するだけでなく、自分もその中の一人

として動くことに魅力を感じたからです。

ですから、弁護士になってやっただけの仕事ではなく、労働組合、争議団の事件です。多くが中小企業の争議でしたが、裁判所や労働委員会だけでなく、団体交渉に出席したり、ストライキの現場に行ったり、倒産争議となれば金融業者との折衝したりと、いろいろな場面で登場することになりました。弁護士は当事者ではありません。最終判断は、労働組合や争議団にあります。しかし、一緒に討議し、一緒に「勝ち」に向かっって進めて行く過程は、弁護士として非常に楽しいものでした。

しかし、時代は移ろって、労働組合の活動も低調を極めるようになりまし。そこへ今日の不況の波が押し寄せています。問題がなくなつたわけではありません。リストラの名の下に抵抗の術を失っているのが現状です。私が弁護士になる前年、沖電気は整理解雇が行われ、大きな争議になりました。私も弁護団の末席に位置しましたが、当時整理解雇は「伝家の宝刀」と言われ、経営者サイドからも批判の音が挙がりました。しかし今、整理解雇を「伝家の宝刀」と認識する人はいないと思ひます。そんな状況で、私の弁護士としての楽しかった時代も終わらざるを得ませんでした。

ただ、別の出会いもありました。セクシャルハラスメントという言葉との出会いです。それまで、多くの女性が不快を感じてもなかなか表現できなかったことが、この言葉を持つことによつて、表現できるようになつたことに、言葉のすごさを感じました。

同時に、私自身がどこかで封じ込めていた思いを解き放つ事ができる出会いでありました。

私はそれまで、女性が少ない場所にいることが多く大切にされるという側面が多かつたせいがあるがゆえに鈍感なせいか、女性である余り持つていませんでした。しかし、セクシャルハラスメントの個別事例に接して、被害者の感情に私の感情が実によく共感していきまし。それまで、男女差別を口にしなから、どこか理屈であつたものが、セクシャルハラスメントの場合は自分の気持ちでわかるのです。それ以降の私のテーマのひとつに、女性に忠実に仕事をしていこうが加わりました。

ただ、傷ついた女性の心情に心を添わせることは、思うほど簡単ではありません。傷ついた心を正しく理解する勉強をしないといけない状態となり、私が振り回されていると感じることも再三です。それでも、女性に忠実にのテーマは、まだ手放すつもりはありません。

四 最後に

ここまで、私の雑な文章に付き合つていただきありがとうございます。今、大幅人員増を前提に司法改革が進められようとしている中で、一〇年後、二〇年後の弁護士の仕事はどうなっているか、私に予測はつきません。私が書いてきた経験は、私がこれまでやってきた経験でしかなく、これまででありません。ただ、仕事を自分で決めて行く自由さ、社会に問題提起をしていく自由さは、この仕事、資格の間違ひないところかと思ひます。後輩の皆さんの一つの選択肢にどうぞ。

# 支部だより

## 東京支部(東進会)

当会は、正副会長のほかに事務方の正副理事長、理事、学年監事を置いて会の運営に当たっています。年一回の総会・懇親会のほかに、毎月料理と銘酒を楽しむ「謳粹会」や年二回のゴルフ会を開催したりしています。年三、四回機関誌「東進」を発行しています。年会費は三千円ですが、約四百名の会員が納めています。

平成十二年度総会・懇親会は去る六月三日(土)、神田学士会館において、出席者百七十名強と盛況のうちに開催されました。この総会・懇親会は毎年当番年次を決めてその年次が中心となって準備しています。今回の当番幹事は四十一年卒の皆さんでした。

総会は、会長挨拶の後、大野金一理事長(三十一年卒)から一年間の活動報告、総会議案を一括して上程し承認された後、母校からは、一高祭のため欠席の長瀬校長先生に代わって濱田洋一教頭先生が母校の近況について報告されました。

懇親会は、当番幹事の四十一年卒の卒業時の恩師、青山和義、池井芳寛、稲見敏雄、大曾根宏亮、



長壁栄進、富田昇、矢口四郎、横田尚義、和田隆の各先生方や茨城県人会の五来義忠事務局長を囲んで、アトラクションの海老原順氏(四十六年卒)率いるジャズバンドの演奏と奥さんの北村みづえ氏とのデュエットによるシャンソンなどをバックに、楽しい午後のおとぎを過ごしました。

東進会会長 植木満(中32回)

## 柏支部

本会は、故郷の茨城県を離れ、千葉県西部に移転し主に勤務先を求め生活している同窓会であります。

現在柏市二百名、我孫子市百七十七名、流山市六十一名、沼南町十二名、その他二名で合計三百九十五名になります。

総会は毎年十一月三日とし、平成十一年度は、長瀬学校長、大曾根進修同窓会副会長をお迎えし、学校長から母校の現状、副会長から進修同窓会の活動等の貴重なお話をいただきました。

総会会場には清水画伯(三十一回卒)の絵画を飾り、総会後の懇親会では、会員の近況等の紹介があり、最後は、母校の校歌を斉唱し終了しました。

役員は相談役二名、会長一名、副会長三名、監事一名、学年監事二十七名により構成され、会員の総会出席に協力をお願いしているところでもあります。

平成十二年度から松戸地区二百三名が新しく参加し、総合計六百三名と拡大します。(旧制中学は六十名を擁し、益々高齢化が進んでいます。)

大久保 仁(中46回)

## 平成十三年度

### 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会は次の通り開催します。

例年、一般会員の出席は少数です。同窓会運営に御理解・御協力をいただくためにも、是非御出席下さい。

一、期日 平成十三年四月八日(日)

午後一時

二、会場 土浦一高体育館

### 卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年 中四十回

卒業五十周年 高三回

卒業四十周年 高十三回

卒業二十五周年 高二十八回

定一回

定十一回

定二十六回

数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会を開催いたします。

### 土浦一高ホームページ開設

インターネットにおいて、土浦一高のホームページが開設されました。

学校概要

土浦一高の歩み

進路状況

部活動紹介

定時制紹介

土浦一高写真館

最新ニュース

など、母校の情報が満載です。

是非、アクセスしてみてください。

アドレス <http://www.net-ibaraki.ne.jp/kou-055>

### 百周年記念誌

## 進修百年

(B5版一、〇九一頁)

土浦中学・土浦一高

百年のあゆみ

価格三、五〇〇円

(送料別)

お問い合わせ

土浦一高進修同窓会事務局

〇二九八(二二)〇一三七

# おしらせ おたより

## 卒業四十周年記念同窓会

我々、高校十二回卒業生は、去る四月九日(日)に開催された平成十二年度の進修同窓会総会及び記念祝賀式に卒業四〇周年学年として招待を受けました。

それを機会に、今回も谷中君のおほねおりで、前日の八日(土)に、江戸屋ホテルにて同窓会を開きました。前回は、母校創立百周年を一年後に控えた平成七年三月に、同窓会館建設を中心とした記念事業のための募金活動の成功を期して開催しました。ついこの間のような気がしていますが早五年も経っていることに、歳月の流れの早さを改めて実感させられました。今回の出席者は、五年前より少なかつたように感じました。前回は本当に久しぶりだった所為もありましょう。何と言っても大きな違いは、恩師の方々のご出席で、前回のときは、稲見、河野、久保、旧橋、高木、矢口の各先生6人の方々が、昔と少しも変わらぬ元気なお姿でおいでになつて下さいました。今回の席には、久保先生お一人であった点が、大変寂しさを感じました。お出でになれなかつた恩師の方々も、ご都合がお悪かつただけのことで、事故で亡くなられた羽方先生以外は、皆さん元気で過ごさしのことと伺っております。

今回の出席者は七九人でした。



第12回卒業同窓会

考えてみれば、来年は、一二回生のほとんどが還暦を迎えることになる。世界一の長命国になつた今、還暦年齢は、体型や面立ちにそれなりの変化は隠すべくもなく表れてはいるが、皆さん年寄りの意識がない上、それぞれ豊かな人生経験とまだまだ現役としての元気を、高校時代そのものを彷彿とさせるくらい持ち合わせており、尽きることなく、話題を提供するため、次から次へと話が弾み、時間の経つのを忘れてしまいました。

明けて、九日の総会にはみんな揃つて出席し、記念品なども頂きました。総会のあとの祝賀会

は、招待された学年全体の集まりでしたが、自然と同じ学年が近くに集まり、昨夜の続きのようになりました。

次回総会に招待を受けるのは十年後、恩師の方々もお元気とはいえず、次回まで待つて居ては、揃つてご出席いただける可能性は少なくなると思います。また、我々としても、年々気持ちとはともかく、身体的には無理の利かない状況になつていくので、今までのように五年或いはそれ以上の時間をおいての開催は、一度都合で欠席したりすると、次の機会がなくなる可能性もあるのです。毎回世話役の労をとつて下さっている谷中会長(谷中君には、十二回代表として様々なお世話を頂いてきており同窓生一同我々の会長と思つていたのですが、正式に会長という役目をお願いしてはなかつたというところで、今回の席で、緊急提案があり、出席者全員一致で「十二回同窓生の会長」となつていただきました。欠席された方々には是非ご了承願います。)には大変お手数をかけて申し訳ないのですが、同窓会開催周期を是非短くして欲しいという声がありました。

ところで、昨年十一回生が盛大に同窓生ゴルフの会を開催していると会報にありましたが、十二回生の間にも同様の会があり毎年コンペを開いているとのことですが、参加の意思のある会員は、鯨井君に連絡をとつてみて下さい。

(文責 北島瑞男)

## 卒業二十五周年同窓会

平成十二年の桜前線は平年並みに戻っていました。土浦一高の全ての桜が、四月九日のために全神経を集中していました。

正午、その桜吹雪の祝福を受けて、私達は二十五ぶりに集合しました。

思い出の旧正面玄関での記念撮影。体育館における進修同窓会総会と記念祝賀式。まるで映画の一場面のように時が進んでいきます。総会の時に、現役の応援団のリードによつて歌つた校歌。卒業後絶えず口ずさんでいた校歌なのに、何故胸が熱くなるのか。

当日は、その校歌をもう一度歌うことになっていました。午後四時より二十七回卒生の学年同窓会を霞ヶ浦観光ホテルで引き続き行いました。会場内のスタジオで改めて記念撮影。よくぞ集まつてく



れました、百三十名。学年の約三分の一が参集しました。先生方も学年主任の宮崎昭先生をはじめ、各担任など九名の恩師が出席してくださいました。先生方と皆との大集合写真、一生の宝物ができました。

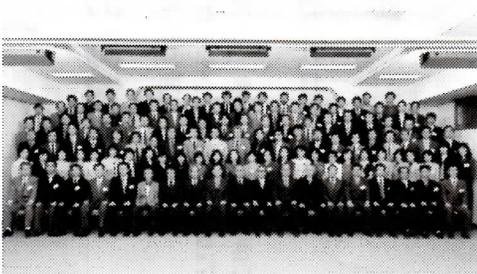
どれだけあつても足りない懇親会の時間。先生方一人一人の挨拶に会場は爆笑の連続。話をしたい人はいくらでもいるのに、映画のコマだけは規則正しく進む。今度は応援団OBのリードで、校歌と恩師へのエール。

二次会、三次会……とどまることを忘れて土浦の夜は更けていきます。

新たな希望とエネルギーを受け取つて、各自、日常へと戻つていきました。

関係各位に感謝。

(文責 須田義之)



第27回卒業同窓会

# 母校だより

## 第五十三回一高祭 苦勞が報われた一高祭

一高祭実行委員長 麻生 将太郎

一高祭が終わり、だいぶ時間が経ちました。今思い返すと、色々なことがありました。十一月から一高祭の土台を決め始めました。特にテーマにはかなりの時間を費やしました。テーマを決めるために、生徒から一般公募して、その後テーマを話し合いましたが、テーマはなかなか一つに決まらず、毎日遅くまで残って話し合いをしました。ようやくテーマが「地球く世界は一つ」に決まりました。テーマを決めた理由は二十一世紀を迎えるにあたって、二十世紀では人間は環境問題、民族問題、戦争などの諸問題を数多く引き起こしてきました。その諸問題を解決して明るい未来を築いていくということを決めました。その他にも前夜祭の内容や当日の企画もより良いものを作るために話し合いました。準備の段階でも一高祭が近づくにつれて、次第に生徒も準備に忙しくなり、放課後はほとんど一高祭の準備で一杯でした。



毎年恒例となっている吹奏楽部による広場でのミニコンサート

発表も盛り込まれました。二日目三日目は各クラスの企画や有志による企画がメインでした。今年は楽しく面白い企画がある一方で、文化的な企画も多く目立ちました。クラス企画の中には、戦争について調べた展示や、最近問題になっていることを調べた壁新聞の発表会、ミニコンサートやジャズコンサートがありました。またクラス対抗だったデイベートも一年生から三年生までの混合の縦割りしたり、案内所に掲示板を新設したり、といったように毎年恒例の企画や装飾にも多くの工夫が凝らされていきました。また、後夜祭も多くの生徒が参加し、一高祭を最後まで存分に楽しみました。今年の一高祭も準備から終わりまで生徒一人一人が一生懸命に取り組む、非常に充実した一高祭を作ることができたと思います。

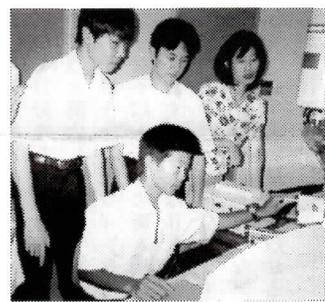
## 第二十三回一高オリンピック 友情そして感動へ

一高オリンピック実行委員長 沼尻 翔

九月十四日、一高三大行事の第二弾である第二十三回一高オリンピックが開催されました。六月に委員会が発足され二年生が中心となり企画、運営と本番に向けて準備を進めてきました。今年は一高祭最後の一高オリンピックということで実行委員一同一丸となって本番当日を迎えました。前日からの雨が心配されましたが、全校生徒の熱意で雲も吹き飛び一安心でした。

今年も各競技でたくさんの方々が展開されました。一高オリンピックのメインと言えれば綱引き。クラスのほぼ全員が参加することができ、よりいっそうクラスの団結力が深まったことでしょう。熱戦が繰り広げられるたびに大きな感動をよび起こしました。最後の競技は、クラス対抗リレーです。クラスの期待を背負い全力疾走する選手たち。その選手に向かって声をからして声援をする生徒たちの姿、会場全体が大きなひとつの輪となり、大成功で幕を閉じることができました。

最後に、一高オリンピックの企画から様々な形で御指導をして下さった先生方、また何よりも自分を支えてくれ、大成功へと導く原動力となってくれた実行委員、各部部长、体育委員のみなさんに感謝します。本当にありがとうございました。



SEM実習

## 理科科夏季特別実験講座 電子顕微鏡にふれて

一年 野口 雄二郎

言葉として、物として知っていた電子顕微鏡。でも実際には触れたことはありません。だから私はこの特別実験講座を楽しみにしていました。

電子顕微鏡を、なんと普通のパソコンで操作していたことにびっくりしました。電子顕微鏡って、とっても大きい感覚があったのですが、思ったよりも小さかったのです。それでも大きいことは大きいけれど、私たちの班はパンの食感と微細構造の関係について電子顕微鏡を使って調べたのですが、あれはパンじゃないです。でんぶん一粒一粒がつながっているのはびっくりわかりました。私はそれから少しの間パンを食べたくなくなりました。

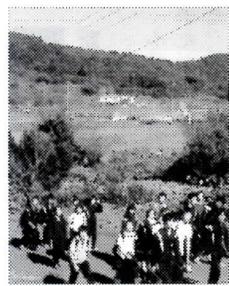
電子顕微鏡は私達が想像を超えたものを見せてくれます。そしてもっと便利な装置に進化してゆきましょう。私もその開発に関わりたくくなりました。

## 歩く会を終えて

歩く会実行委員長 一石 達朗

十月十四日、秋晴れのもと歩く会が開催されました。僕達歩く会実行委員会は、七月から準備を始めました。今年のコースは、八郷町のフラワーパークから出発し、青年の家を通り、学校へ戻ってくるコースでした。このコースは、企画係が中心になって決めました。夏休みには、委員全員で三回程歩き、コースの確認をしました。二学期に入ると、栗・看板・渉外の各係も本格的に始動し、忙しい日々を送りました。十月になり中間審査が終わると、目前に迫った当日の最終確認に追われました。当日は、チェックポイント通過者の確認、施設や道路の清掃などそれぞれ分担して行いました。歩く会終了後のアンケート調査によると好評だったようで安心しました。

仕事を進めていく中で、様々な問題や苦難を委員全員が力を合わせて乗り越え、一つの行事を作り上げることができました。この歩く会は、僕達実行委員にとってよい思い出になりました。最後に、先生方はじめ、協力して下さった方々本当にありがとうございました。



秋晴れのもとで行われた「歩く会」

職員室だより

地歴・公民

本年は、小松崎剛先生(高15)を美浦養護学校の教頭としてお送りし、代わって、かつて本校で長く教鞭を執られた飯村弘先生(高5)をお迎えいたしました。一年は倫理池井(1H担任・高30)・横瀬(1A担任)、政経中島(高30)、二年は世界史安藤(2I担任)・大津、日本史大津、地理飯村、三年は世界史新井(3A担任)・池井、日本史後藤、地理飯村・田村(高32)の九名のスタッフです。飯村先生は、地形図等の作業学習を積極的に取り入れながら、熱心に2年生の地理教育にあたって下さっています。また、大津先生は生徒指導副部長、中島先生は教務副部長、田村先生は教育相談室室長として、それぞれ教科を離れての活動も多くありました。夏季休業中には、例年どおり、三年生を対象とした課外を積極的に行いました。

定時制

定時制職員室は本館一階の奥まったところにあり、生徒の登校時間には活気を呈します。許可を得なければ授業に出られないため、遅刻してきた生徒が教室に行く前に必ず立ち寄るからです。ルーズさのために遅刻する生徒には時に叱責の言葉が飛ぶこともあります。仕事は都合で遅れる生徒も多いため、普段は和気あいあいとした会話が交わされます。こうしたやり取りは生徒と職員の間で、定時制ならではの光景と言えます。

剣道部

各部だより

体育館わきにひっそりと建つ格技場の一階が、私達土浦一高剣道部の練習場です。放課後には毎日激しくぶつかり合う竹刀の音と気合で道場はいっぱいになります。現在、部員数は男子十八人、女子五人、マネージャー一人の計二十四人で活動しています。今年の春には私達の予想以上にやる気溢れる新入部員が大勢入部したので益々活気が出てきました。今では道場が狭く感じるほどですが、お互いに良い刺激となっています。現在は学校に剣道の技術を御指導下さる先生がいらっしゃらないので時々様子を見に来て下さる芳明館の富島先生に教えを頂いています。しかし、日常の練習のほとんどは自分達でメニューを考え行っているだけで、いかなる練習でも苦勞が絶えません。でもその分、みんなが自主的に練習し、お互いを磨き合えるので少しずつ実力もついてきたように思います。先日、県南の秋期新人大会ではみんなで力を合わせ三位を勝ち取ることができました。けれど、それぞれに納得のいかない部分も多く、私達はこの結果に満足したわけではありません。「関東大会出場」という大きな目標を果たすべく、私達は自分達の力をどこまで伸ばせるか努力を重ねていくつもりです。また、実力が重視される世界であっても、互いへの思いやりや団結を

バスケットボール部

橋田 有紀

忘れずに更によい部活になるよう頑張ろうと思っています。これからも応援よろしくお願いします。私たちがバスケット部は、部員が男子二十五人、女子十五人と人数に恵まれ、顧問の堤先生の下で毎日練習に励んでいます。普段はバス、ドリブル、シュートなどの基礎的な練習を中心に行い、その間に速攻や五対五のような実践的な練習も取り入れていきます。夏休みには二泊三日の合宿もあり、その時はかなり走り込みました。今思えば、その経験が、肉体的にも精神的にも今の私たちの基盤となっているような気がしています。そういった基礎段階を経て、最近ようやくチームとしてのまとまったプレーができるようになってきました。とは言ってもまだまだ未熟で、他の高校と練習試合をしても、納得がいくプレーができないで負けてしまうことがあります。その度に「やしい思いをし、自分自身に腹が立つばかりですが、今はただそのくやしさをばねにして自分たちの弱点をなくしていく」と努力しています。

頑張る「高生」

新体操(関東大会出場)

三年 市村 里沙

小学生の頃から新体操を続けてきたが、今年の夏で現役を引退した。そして最後の大きな大会となったのが六月初めの関東大会だった。高校生になってからは体重のコントロールも思うように行かず、試合前は大変だった。これも自分の意思の弱さが故だと思おうと、本当に情けなく思った。試合では、最後まで自分に自信を持って臨んだため、納得のいく演技はできなかった。すごく悔しかった。引退してみて、中途半端な意思では決して人には勝てないのだと痛感し、深く後悔した。それでも七年間続けてきて、沢山の人に出会い共に感動を味わってこれたことを幸せに思う。八年間学んだことは、決して忘れずにいたい。

将棋(全国大会出場)

三年 渡辺 茂樹

最後の大会で負けた瞬間、言いようのないさみしさを感じた。もうこれで引退なんだと思うと、何だか力が抜けてしまった。スポーツ選手などが「力を出さなくて負けたから悔いはない」などと言う時がある。しかし将棋にこの言葉は当てはまらないだろう。将棋で負けた時に、力を出さなかったと思えることなどない。敗者には、悔しさしか残らない。満足感など全く感じられない。しかし何回負けてもまた将棋を指したいと思うのも事実だ。将棋とは、なんとまあ不思議なゲームなんだろうか。まさに将棋は王将を中心とした神のゲームである。

旧職員では、風間俊也先生(高10)が土浦三高の校長を退職なさいました。

旧職員では、風間俊也先生(高10)が土浦三高の校長を退職なさいました。

平成十二年度入試報告

進路指導部

平成十二年度入試では、東大三名(新卒二十名)、筑波大五二名(新卒四二名)が合格しました。東大は二年連続で三十の大台に乗せ、全国公立高中第二位であり、筑波大は全国第一位を堅持しました。筑波大医学専門学群に七名(新卒四名)、東工大十八名(新卒十三名)、東北大二十四名(新卒十五名)の合格を出したことは、本校生の難関大志向に道筋を開くものとして賞賛に値します。

私大では慶応大が六九名(新卒三八名)、早稲田大八四名(新卒四三名)、上智大三二名(新卒一八名)、東京理大一〇一名(新卒五一名)の合格者を出し大健闘しました。

国立大合格者の総数では一八九名(新卒一一九名)に止まりましたが、内容的に大変充実した数字であると言えます。公立大・私立大等を加えた合格者総数は八二五名(新卒四四五名)で、五月現在新卒者の四年制大学進学者数は、前年比七名増の二〇九名となっております。再受験の道を選んだ者は一五一名となります。

ここ数年の難関大学志向は今年も一層顕著で、新卒生の合格国立大学数も減少をもたらしています。昨年の二一大学から一六大学に減少しました。横浜国大・千葉大・埼玉大・茨城大・群馬大・宇都宮大などの受験数が減ったのははじめ、医学部を除くと全国各地

の国立大を受験しなくなったことが原因です。

また、昨年・今年と再受験の道を選ぶ者が増える傾向にあり、動向が注目されます。因に、昨年再受験を選んだ一五三名のうち一三一名が進学しました。内訳は東大十一名、国立大医学部十名、筑波大九名、東北大一名、東工大四名、一橋大一名、お茶の水大二名、京都大三名、早稲田大一名、慶応大一二名、上智大四名という数で大変な盛況です。

こうした状況下で、第一志望の難関大への現役合格をめざすのは勿論ですが、浪人しても第一志望を貫徹するという構えをとる本校生が増えてきていることは否めません。

本校の進学指導は現役合格優先主義で進んできました。三年間で希望の難関大学へ入れる所まで学力を高めて行く所に目標を置いていました。(勿論、入れる大学へなりふり構わず入れるような指導とは一線を画しています。)東大をはじめとする主要大学の合格者の現役占有率が高いのはそのためでした。もし現役合格率がさらに下降した場合、本校の進学指導が活力を失うことが懸念されます。浪人生の実績は並々ならぬ奮闘の賜ですが、在学時に培った高い基礎力あつてのことであることを現役生は肝に銘じて置く必要があると思います。

平成12年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

Table with 4 columns: University Name, Total合格者, Total新卒, and sub-totals for 国立大計 and 国立短大計.

Table with 4 columns: University Name, Total合格者, Total新卒, and sub-totals for 公立大計 and 私立短大計.

Table with 4 columns: University Name, Total合格者, Total新卒, and sub-totals for 国立大計 and 国立短大計.

進修同窓会会務分担 (平成12年度)

平成11年度 進修同窓会決算書

1. 本部

Table with 4 columns: 担当 (Role), 本部役員 (Department Members), 学校 (School), 主な業務 (Main Duties). Rows include 総務 (General Affairs), 経理 (Accounting), 会報 (Publications), 名簿 (Registers), 事務局 (Secretariat), and 監事 (Auditors).

収入額 一金 22,987,276円也
支出額 一金 10,971,952円也
差引残高 一金 12,015,324円也

Table for 平成11年度 進修同窓会決算書 (Income Statement). Columns: 項目 (Item), 予算額 (Budget), 決算額 (Actual), 比較増減 (Change), 備考 (Remarks). Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 寄付金, 雑収入, and 合計.

Table for 平成11年度 進修同窓会決算書 (Expenditure Statement). Columns: 項目 (Item), 予算額 (Budget), 決算額 (Actual), 残額 (Residual), 備考 (Remarks). Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業25,40,60周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館管理補助費, 予備費, and 合計.

2. 支部

支部会等に際して、本部に対し出席要請がある場合は、会長又は下記の副会長のうち1名が、校長(または代理人)とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りではない。
豊嶋、横田、大曾根、青山、植木、幡谷(浩)、桜井

3. 進修同窓会校内幹事

原田晋市(高20理科) 櫻井浩(高27英語) 谷口実(高31保健)
原光広(高32英語) 矢ノ中芳夫(高12事務室長) 秋田剛(事務係長)

進修同窓会基金管理委員会

- 進修同窓会会長 幡谷 祐一 (中40回)
委員 11名
進修同窓会副会長 4名 豊嶋 貴 (中37回)
横田 尚義 (中44回)
大曾根宏亮 (高4回)
桜井 光孝 (定4回)
全日制教頭 1名 濱田 洋一 (高11回)
事務室長 1名 矢ノ中芳夫 (高12回)
その他 5名 青山 和義 (高8回) 副会長
長瀬 宗男 (高11回) 校長
木島 幸夫 (高1回) 本部監事
谷中 良雄 (高12回)
野村 ルナ (高15回)
監事 2名 野山 茂 (中39回)
田嶋 栄吉 (高11回)

上記のとおり決算しました。 ※項目間の流用を認める。

平成12年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成12年3月31日

監事 野山 茂 印
監事 長南 紀郎 印

「会員名簿」の取り扱いに関するお願い
本会では五年ごとに、同窓生相互の連繫並びに、各分野でご活躍の母校関係者の、さらなる発展等を祈念し、会員名簿を発行しておりますが、プライバシー漏洩等に配慮し、取り扱いには細心の注意をお願いいたします。
また、学校名、個人名、あるいは業者名を名乗り、名簿作成を口実に、電話による住所、電話番号等を問い合わせる事例があるようです。学校、同窓会では、電話での問い合わせは一切しておりませんので、併せてご注意願います。

編集後記

日本館脇のアカンサスの淡紫色の花が咲き始めた頃、例年のない猛暑の中、編集作業を開始しました。そして、遅い紅葉前線がや々と南下してきた十月、どうにか会報第五七号の完成を迎えました。
本号の編集にあたり、各方面の方々より、それぞれのご活躍を物語る数多くの玉稿、貴重なお写真を賜りました。厚く御礼申し上げます。
紙面の改版を少し試みました。ご感想をお聞かせ下さい。今後さらに充実した内容にしていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

会費納入のご報告とお願ひ

平成十一年度の会費納入状況は、三月末現在、三、五七五名の皆様から、一、一、五五〇、〇〇〇円を頂きました。
今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

進修同窓会会報第五七号
発行日 平成十二年十一月一日
会報編集委員会

編集委員
横田尚義
木島幸夫
堀越博
宇田川仁
宇田邦利

校内

原光広
櫻井浩
谷口実
宇田邦利
鈴木淳一
鈴木志郎
谷中良雄